

人造人間事件

海野十三

青空文庫

理学士帆村莊六は、築地の夜を散歩するのがことに好きだった。

その夜も、彼はただ一人で、冷い秋雨にそば濡れながら、明石町の河岸から新富町の濠端へ向けてブラブラ歩いていた。暗い雨空を見あげると、天国の塔のように高いサンタマリア病院の白堊ビルがクツキリと暗闇に聳えたっているのが見えた。このあたりには今も明治時代の異国情調が漂っていて、ときによ

ると彼自身が古い錦にしきえ絵の人物であるような錯さつ覚かくさえ起るのであつた。

通りかかった火の番小屋の中から、疝かんだか高い浪な花わ節ぶしの放送が洩もれてきた。声はたいへん歪ゆがんでいるけれど、正まさしく蒼そう竜りゆう齋さい膝ひざ丸まるの「乃木將軍墓参のぎしやうぐんぼさんの旅」である。時計の針は九時を廻つて、九時半の方に近づきつつあるものらしい。さつき喫茶店リラで紅茶を啜すすっていたときには、八時からの演芸放送のトップとして、ラジオドラマ「空襲くうしゆう葬送曲そうそうきよく」が始まったばかりのところだつたが。

葬送曲だの墓参だのと不吉ふきつなものばかり並べて、放送局も今夜はなんという智慧のないプログラムを作つたのだらう。然しかし不吉

なものが盛んに目につく時は、その源の必ず大きな不吉が存在しているものだ。帆村はそれを思つてドキンとした。

(———なにか、ちなまぐさ血 腥い事件が起つたのだらう。殺人事件か、それとも戦争か)

さつき喫茶店リラで、紅茶を啜りながら聴くともなしに聴いたラジオドラマは、将来戦を演出しているものだった。東京市民は空襲警報にしきりと脅え、おび太平洋では彼我の海戦部隊が微妙なる戦機を狙っているという場面であつた。戦争は果して起るのであるうか。

帆村理学士は濠端に出た。冷い風が横合からサツと吹いてきた。彼はレーンコートの襟をえりしっかり搔きあわせ、サンタマリア病院

の建物について曲った。

病院の大玄関は、火葬炉の前戸まえどのように厳いめしく静まりかえり、何処かにシャーリー・テンブルに似た顔の天使かすの微かな寝息が聞えてくるような気がした。道みちばた傍には盗んでゆかれそうな街灯がポツンと立っていて、しつぽり濡れたアスファルトの舗道に、黄色い灯影ほかげを落としていた。

そのときだった。一台の自動車が背後の方から勢よく疾走してきた。帆村は泥しぶきをかけられることを恐れて、ツと身体を病院の玄関脇によせた。

すると自動車は、途端にスピードを落として、病院の玄関前にピタリと停った。彼は見た。自動車の中には、中腰になって、洋

装の凄^{せい}艶^{えん}なマダムとも令嬢とも判別しがたい美女が乗っていた。しかしなんとという真^ま青^{あお}な顔だ。

「うむ、なにかあつたな」

帆村はドキンとした。

女は濃いグリーンの長いオーヴァを着ていた。車を返すと、非常に気がせくらしく、受付の呼^{よび}鈴^{りん}にとびつくようにして釦^{ボタン}を押した。

「ハロー、ウララさん。いまごろどうしましたか」

突然奥の方から外国なまりのある男の声がした。見ると丁度このとき、病院の中から一人の若い西洋人が医師の持つ大きな鞆^{かばん}を抱えて現れた。

「おおジョン。まあよかった。あたし、貴方に会いにきたところよ。とつても大変なことが起つたわよ」

「大変なこと？　大変というかどうかは大変ですか」

「今家に帰ってみるとあの人死んでいるのよ。あたしどうしましよう」

「おう、あの人——あの人死にましたか。私、すぐ診察に行きましたよ」

「診察ですって、まあ。そんなことをしてももう駄目ですわ。あの人頭は石榴ぎんくろのように割れているんですもの」

「石榴というと」

「滅茶滅茶めっちゃめっちゃになって、真赤なんです。トマトを石で潰したように

……」

「おおそれは大変！　どんな訳で、そんなひどい怪我をしたのですか」

「どうしてですって」女は意外だという面持で、外人の顔を見上げた。

「……貴郎あなたの御存知ないことを、どうしてあたしが知っているのですか」

と声をおとした。

ジョンと呼ばれる外人は、ずり落ちそうになった折鞆を抱えなおした。

「ウララさん。もしやあの人は、何者かに殺されたのではないの

ですか」

「まあ……」と女は愕おどろいて「もちろん殺されたに違いありませんわ。あたし、これからどうしましょう」

ジヨンは黙って立っていた。

ウララは苛いらいら々々した様子で彼の腕に手をかけ、

「ねえジヨン。あたしはもう決心しているのよ。こうなつては仕方がないわ。さあ、これからすぐに、あたしを連れて逃げて下さい」

といって、彼の腕を揺ゆすぶった。

ジヨンは、またがり落ちそうになった鞆を抱えなおしてから、ウララの肩に手をかけ、

「ウララ、お聞きなさい。逃げることは、もつと後にしても遅くはありません。それよりも、あなたの家に行ってみましょう。死体の始末がうまく出来ればいいでしょう。さあ、急ぎましょう」

二人が玄関から出てくる気配なので、柱の蔭に隠れていた帆村はハツと愕いた。咄嗟とつさに彼は、壁にピタリと身体を密着させた。二人はついにそれには気づかず、スタスタと雨の中に急ぎ足に出ていった。

それと入れ違いに、受付の窓が開いて、看護婦が顔を出した。「アーラ、やっぱり誰も居やしないわ。だから、あたしはベルなんか鳴りやしないと云つたのに」

2

帆村は雨に濡れてゆく背丈のたいへん違つた男女の後を巧みに追つていった。二人は濠端^{ほりばた}へ出たが、自動車にも会わず、そのままドンドン向うへ歩いていった。そして新富橋^{しんとみばし}の上にさしかかったとき、女はハツとした様子で立ち停つた。

女は向うを指した。^{ゆびさ}

「アラ、窓に灯がついているわ。誰もいない筈なのに」

橋を越えて、濠添いに右へ取つていったところに、人造人間の

研究で知られた竹田博士研究所が聳そびえている。女は明らかにその家の窓を指しているのだった。

二人は急ぎ足となった。そして一度追いついた帆村を、また追いつかなくて、濠端はしを駆け抜けた。

門前ちかくにまで進んだ二人だったけれど、何を見たのか俄にわかに急いで引返してきた。帆村は面喰めんくらった。しかし本当に面喰つたのは二人の方らしかった。男は女を後にかばってツと濠端に身を引いた。外人の大きな拳こぶしが長いズボンの蔭にブルブルと呻うなっているのが判った。帆村はジロリと一瞥いちべつしたまま、平然と二人の前を通りすぎた。彼は後の方で、深い二つの吐息といきのするのを聞いた。

帆村は構わず、竹田博士研究所の門前に近づいた。石段の上に、玄関の扉が開け放しになっていて、その奥には電灯が一つ、荒涼たる光を投げていた。しかし人影はない。

彼は構わず石段をのぼっていった。石段を上りきったと思った
ら、

「こらッ」と大喝だいかつ一声、塀のかげから佩劍はいけんを鳴らして飛びだしてきた一人の警官！ 帆村の頸くびつ玉をギユツとおさえつけた、帽子が前にすつ飛んだ。

「まあ待って下さい。帆村ですよ」

「なんだ、帆村だとオ。——」警官は愕いて彼の顔を覗のぞきこんで「——やあ、これはどうも失敬。帆村さん、莫迦ばかに嗅かぎつけよう

が早いじゃありませんか」

「なアに、この辺は僕の縄ばりなんでネ」

と、いつて彼は笑った。帆村理学士といえど道楽半分に私立探偵をやっていることで警官仲間によく知れわたっていた。彼の学識を基礎とする一風変った探偵法は検察当局にも重宝ちようほうがられて、しばしば難事件の応援に頼まれることがあつた。かれは有名な悪わ口家くちやで、事件に緊張している下ツ端したの警官たちの頤あごを解く妙法を心得ていた。

「ねえ君。これは逃げた梟ふくろうでも捕とらえる演習しているのかネ」

「冗談じゃありませんよ。ここの主人が殺やられたんですよ」

「ほう、竹田博士殺害事件か。それにしてもはいやに静かだねえ。」

国際連盟は押入から蒲団ふとんでもだして、お揃いそろで一と寝入りやって
いるのかネ」

「じよ、冗談を……」

といっているところへ、表に自動車のエンジンが高らかに響い
て、帆村のいう所謂いわゆる国際連盟委員がドヤドヤと入ってきた。雁か
金りがね検事、丘予審判事、大江山捜査課長、帯おびひろ広警部をはじめ多
数の係官一行の顔がすっかり揃っていた。「お、帆村君、もう来
ていたか。電話をかけたが、行方不明だということだったぞ」

と、雁金検事が、彼の肩を叩いた。

「いや貴官がたが御存知ないうちに、うちの助手に殺人現場を教
えとくのは失礼だと思ひましてネ」

と帆村は挨拶を返した。

「さあ、始めましょう」

大江山課長は先登せんとうに立つと、家の中に入つていった。帆村も一番しんが殿りからついていった。

階段を二つのぼると、三階が博士の実験室になつていた。そこはただつ広い三十坪ばかりの部屋だった。沢山の器械棚が壁ぎわに並んでいた。隅には小さい鉄工場ほどの工具機械が据すえつけてある。それと反対の東側の窓ぎわには紫色の厚いカーテンが張つてあつて、その上に大きな寝台があり、その上に竹田博士の惨さんし死たい体が上を向いて横たわつていた。

係官は、博士の死体のまわりに蝟いしゅう集した。実に見るも無惨な

死にぎまであった。顔面はグシャグシャに押し潰され、人相どころの騒ぎではなかった。もし赤い血にまみれ一本一本ピンと立たあごひげた頤髯の根もとに、ひとつかみほどの白毛しろがを発見しなかつたら、これを博士と認知するのが相当困難であつたらう。竹田博士は年ね齒んし僅かに四十歳であるのに、不精ぶしようから来た頤髯を生やしていたが、どういふものかその黒い毛まじに交つて、丁度頤の先のところに真白なひとつかみの白毛が密生していることで有名だった。

帆村は、竹田博士の死体をちよつと覗いていただけで、間もなくきゆうしゆ鳩首きゆうしゆしている係官の傍を離れた。そして彼は、室内を改めてズーツと見廻したのであった。

そのとき彼の眼についたのは、器械棚と並んで大きな棺桶を壁

ぎわに立てかけたような函はこの中に納まっている鋼鉄製の人造人間であつた。それは人間より少し背が高く中世紀の騎士が、ふたまわりほど大きい甲かちちゆう冑ゆうを着たような恰好をしていて、なかなか立派なものであつた。そして頤の張つた顔を正面に向け、高い鼻をツンと前に伸ばし、その下に切り込んだ三日月形の口こうこう孔こうの奥には高声器が見え、それから円つぶらな二つの眼は光電管でできていた。また両の耳は、昔流行はやつたラジオのラツパのように顔の側面に取りつけられ、前を向いたラツパの口には黒い布きれで覆おほいがしてあつた。

人造人間に近づいて、しばらく見ていると、どこからともなくギリギリギリという低い音がしているのに気がついた。

「オヤ」

と思った帆村は、試みに人造人間の鋼鉄張こうてつぱりの胸に、耳を押しつけてみた。すると愕いた事にヒヤリとするだろうと思った鉄板が生暖く、そしてその鉄板の向うにギリギリギリという何か小さい器械が廻っているらしい音を聞きとることができた。

「ほう、この人造人間は生きているぞ」

彼は目を瞠みはって、改めてこの人造人間を眺めなおした。そのとき彼は、実に愕くべき発見をしたのだった。

「呀あッ！ 血だ、血だッ。人造人間の拳こぶしに、血が一杯ついている！」

帆村の愕きの声に、係官の一行は、函に入った人造人間の前にドヤドヤと集つてきた。

「ナニ血がついているつて。おおこれはひどい」

「やあ、函の底にも、血痕が垂たれている。おう、ちよつと函の前を皆、どいたどいた」

血痕と聞いて、一同、爪つまみぎ先だつて左右にサツと分れた。

「ホラホラ。ここにもある、ウム、そこにもある。血痕がズーツ

と続いているぞ」

「なアんだ、寝台のところまで、血痕がつながっているじゃないか。すると、——」

「すると、この人造人間めが、博士を殺^やつたことになる……のか
なア」

「えッ、この人造人間が殺害犯人とは……」

一同は慄^{りっぜん}然^{ぜん}としてその場に立ち竦^{すく}み、この不気味な鋼鉄の怪物をこわごわ見やった。人造人間は、ピクリとも動かなかつた。しかしまた、今にも一声ウオーツと怒号^{どごう}して、函の中から躍り出し、そのような気配にも見えた。

「皆さんはまさか、こんな鋼鉄機械が一人前の靈魂を持っている

と決議なさるわけじやありますまいネ」

と、帆村が横よこ合あから口を出した。

「さあ、そこまで考えているわけじやないが、とにかくこの人造人間の右の拳には博士の顔を粉碎したかもしれない証しょうせき跡せきが歴然と残っている」

と検事は云った。

「こいつが生きている人間だったら」と大江山課長は人造人間を指ゆびさしていった。

「私は躊躇ちゆうちよなく、こいつを逮捕しますがネ。しかし真逆まさか……」

「そうだ。だからわれわれは、この人造人間が博士を殺害してこの函の中に入ったまでの運動をなしとげたことを証明できればよ

いのだ。だがこの人造人間が果して動くものやら動かないものやらわれわれには一向分っていない」

「なアに雁金さん。こいつが動くことだけは確かですよ。今こいつの腹の中では、機械がしきりにゴトゴト廻っているのですよ。誰かこの人造人間に命令することができればいいのです。見わたしたところ貴官など最も適任のように心得ますが、一つ勇しい号令をかけてみられては如何ですか」

と帆村は手を前にのばした。

雁金検事は、すぐ顔の前で手をふった。

そのとき大江山課長が進みでて、

「こういつまでも、訳のわからない機械を相手にしていたのでは

始まりませんから、いつもの手口の方から調べてゆきたいと思いますが、いかがでしょう」

「それもいいですね」と検事が同意した。

「そうになると、まずこの家の家族なんですが、夫人のウララ子が見えません。ばあやのお峰というのは、この事件を知らせて来たので、いま警察に保護してあります。ばあやは耳がきこえないのですが、夫人が外出先から帰ってきたので、お茶を持って上ってきたときに、夫人が入っていたこの部屋の中でさんげき惨劇をチラリと見たのだそうです」

「ウララ夫人は、いつ帰宅したんですか」

「ばあやの話によると、今夜八時をすこし廻ったときだったとい

います」

「すると博士が死体となつた鑑識時刻とあまり違わないネ。その夫人が、今家に居ないし、警察へ届出もしないというのはどうもおかしい」

と検事は首を傾げた。かし帆村はそれを聞いていて、なるほどさつきのあるれがそうだなと肯うなずいた。

「もう一人、この家によく出入りしている人物が居るのです。それは戸口調査で分つていのですが、まづめじょうたろう馬詰丈太郎」といつて、博

士の甥おいに当る男です。彼は一ヶ月前まではこの家の中に同居していたんだが、今は出て五反田附近こたんだのアパートに住んでいます」

「その甥の馬詰けんぎというのにもなにか嫌疑を懸けることがあるのか

ネ」と検事はたずねた。

「彼は亡なくなった博士の助手をして、永くこの部屋に働いていたのです。しかしどつちかというところ、彼は怠け者で、いつも博士からこつびどく叱られていたということです。これもばあやのお峰の話なんですがネ。そして彼が博士の家を出るようになった訳は、どうもウララ夫人によこしまな恋慕れんぼをしたためだという話です」

「なるほど、そいつは容疑者のうちに加えておいていいネ」

そういつているところへ、階下から一名の警官がアタフタと上つてきた。そして一同の前にキチンと姿勢を正して披露した。

「只今、馬詰丈太郎が門前を徘徊はいかいして居りましたので、引捕えてございます」

「おおそれは丁度いい。早速その軟派の甥を調べてみようと思
います、如何で……」

そういう大江山の言葉を、雁金検事はすぐに同意した。

4

やがて博士の甥の丈太郎が、警官に護られて、階段の下から姿
を現わした。彼は気障ではあるが思いの外キチンとした服装をし
ている瘠せ型の青年だった。

丈太郎は伯父の死体を見ると、ハラハラと涙を滾なみだこぼした。そして後をふりかえって係官の前にツカツカと進むより、ヒステリツクな声で喚わめきたてた。

「だ、誰が、この善良なる伯父を殺したのです。ああ僕が心配していた事が到頭とうとう事実になって現れたのです。だから僕は伯父さんの所から出てゆくのに気が進まなかつたんです。さあ、早く犯人を逮捕して下さい」

検事と課長とは、ちよつと顔を見合せた。

「オイ丈太郎。君はなかなか芝居がうまいようだが、その手に乗るようなわれわれでないぞ」

と、大江山は一喝をくらわせた。

「なにが芝居です。そんなことを云う違ひまがあつたら、なぜ貴方がたはもつと大局に目を濺そそがないのです。貴方がたの不注意で、いま国家のために懸けがえのない人造人間研究家が殺害されたのです。国家の大なる損失です。伯父に匹ひつてき敵する研究家が、わが国に一人でも居ると思うのですか」

これには大江山も参つてしまった。かねがね竹田博士の身边を保護する必要のあることを考えないではなかつた。しかしいろいろな手不足のため、心配していながらも、博士の保護を実践しなかつたことは確かに手落ておちである。

大江山が敗色濃いを見てとつて、雁金検事が代つて丈太郎にたずねた。

「すると君は、外国のスパイかなんかのことを云っているようだが、なにかそんな話を知っているのかネ」

「そんな話は、こつちで伺うかがいたいくらいのもですよ。しかし私だつて、すこしは気がついていきますよ。この向うのサンタマリア病院の内科医ジョン・マクレオなんざ、ずいぶん奇怪な行動をしているじゃありませんか。僕は向うの国の興信録をしらべてみました。が、医者としてマクレオの名なんか見当りませんよ。それにあいつの目の鋭いことはどうです。彼奴は物差あいつこそ持ものさしっていないが、ひと目睨にらめば大砲の寸法も分つちまうという目測もくそくの大家に違いありませんよ。あんな奴が、帝都の白昼を悠々歩いているなんざ、全く愕おどろきますよ」

（そうか。あのジョン・マクレオという内科医が、そうなのか）と帆村は胸うちの中で自ら問い自ら答えた。それこそ、今夜、あの病院の玄関でウララ夫人を擁ようしていた男に違いない。

検事はそこでギロリと眼を光らせ、傍に馬のような荒い鼻息をたてている帯広警部の太い腹について云った。

「——サンタマリア病院のジョン・マクレオだ。現場不在証明アリバイを調べること」

警部は返事の代りに、お尻のポケットから手帖を出して書きこんだ。

馬詰丈太郎は煙草たばこを一本口にくわえて、いささか得意げであった。

「オイ馬詰」と突然叫んだのは大江山捜査課長であった。

「他人の話なんか、お前に聞かされなくてもいいんだ。それよりお前の現場不在証明を聞こうじゃないか。博士の殺害された今夜の八時前後、お前は一体何処にいたんだ。それを云え」

「私が何処にいたというのですか、折角せっかくですが、それは別に御参考にはなりませんよ」

と丈太郎は自信たっぷりだった。

「くわしくいうと、私は今夜七時三十分から八時五十分までJOK AKにいましたよ」

「なんだ放送局にか。そこで何をしていたんだ」

「なについて……」と彼は答えるのをやめて、煙草を口に持ってい

つて美味おいしそうに喫すった。

「AKの文芸部に訊きいてごらんになれば分りますよ。つまり早くいうと、私の書いたラジオドラマが今夜八時から三十分間、放送されたのです。出演者はPCLの連中でしたがネ。そんなわけで私はずっとAKのスタディオにつめていたんです。なんなら貰貰つて来た原作ならびに演出料の袋をお目にかけてもいいのですが」

「あああの『空襲葬送曲』というやつですネ」

と帆村が横よこ合あいから口を出した。

「そうです。お聞き下さったですか」

「ええ聞きましたよ。なかなか面白かったですよ。あの地の文章を読んでいたのは、千葉早智子ちばさちこですか」

「ええええそうです。どうかしましたか」

「いや、今夜はお早智女史、いやに雄壮な声を出していましたネ」
「それはそうでしょう。戦争ものですからネ。緊張するのも無理はありません」

二人は事件をそつちのけにして、ラジオドラマの話に熱中していた。

こつちでは大江山課長が雁金検事の前に近づいていった。

「ウララ夫人を早く捜しださにやいけませんネ。一度外から帰つて来て、死んでいる博士をそのままにして外へ出たという行動は腑ふに落ちませんネ。警察とか医師とかにすぐ電話すべきが本当ですからネ」

「君、あの留守番のばあやは大丈夫かネ」

「あああれは大丈夫ですよ。老人なんで、なにが出来るものですか」

「しかし君、人造人間が博士を殺したことが分れば、そんな生きた人間を調べても何にもならんじゃないか」

「いや、人造人間に靈魂がない限り、これは生きた人間の仕業しわざに違いありませんよ」

「うん、この点をハッキリしたいんだがネ、どうも機械というやつは、苦手にがてだ。この人造人間がどうして動くかということがハッキリ分るといいんだが。そうだ、帆村に調べさせよう」

「それがいいですね」

そこで帆村が呼ばれて、この人造人間はどうして動くかを調べようように命ぜられた。

「さあ僕にも、まだ分つてはいないが、馬詰丈太郎氏は、博士の助手を永らくしていたというから、一つ訊いてみましょう」

帆村は馬詰をつれて、人造人間の前へいった。そしてどうすれば動くかと訊ねた。

「そうですね。僕はこの新型の人造人間については知らないんだが、一つ中を開けて見てみましょう」

そういつて彼は物慣れた手つきでドライバ^はーを手にとり、人造人間の胸中をしめつけている鉄扉^{てつぴ}のネジを外していつた。間もなく人造人間の腸^{はらわた}が露出した。腸といつても人造人間のことだから

細々とした機械がギツシリ詰っていて、その間を赤青黄紫と色とりどりの紐線ひもせんが縦横無尽に引張りまわされているのであった。なんとという複雑な構造だろう。竹田博士の素晴らしい脳力のほどがハッキリ窺うかがわれるような気がした。ことに帆村たちの注意を引いたものは、下腹部に置かれた電池からの放電により、心臓部附近に小さい赤電球と青電球とがチカチカと代り番に点滅し、そして大小いくつかの歯車が、ギリギリギリと精確に廻転している光景だった。靈魂はないにしても、この機械人間の心臓も肺臓も、まさにチャンと活動しているのであった。

「——こつちが増幅器で、こつちが継電器ですよ」と馬詰はドライバーの先で機械を指ゆびさした。

「これが身体を直立させるジャイロです。こっちが腕を動かす電で磁石装置んじせき。こっちのが脚の方です。左右二つに分れていますでしょう。首の方もついでに解剖してみましよう」

馬詰は医学者のようにいとも無造作に、人造人間の鉄仮面を剥はぎとった。

「ほら、これが口の代りになる高声器です。ほほう、この人造人間は目が見えませんか。光電管がついていますけれど、電線が外れています。これが耳の働きをするマイクロフォン」

「ちよつと待つてくれたまえ」と帆村が手をあげた。

「するとこの人造人間はどうすれば動くかといえは、結局このマイクに何か信号音を送つてやればいいのだネ」

「まあ今のところ、機械の接続はそうなっていますね」

「ハハア——すると、どんな信号音を送ってやれば、どんな風に動くかという人造人間操縦信号簿といったようなものがなければならぬ。さあ皆さん。その辺を探してみてください下さい」

「よオし、人造人間操縦信号簿か。——」

そこで係官の指揮で、刑事たちは一勢に部屋の中を宝捜しのよ
うに匍はいまわった。

「あッ、これじゃないかなア」

一人の刑事が、機械戸棚と後の壁との間に落ちこんでいる一冊
の薄い帳面をみつけて摘つまみだした。

その帳面の表紙には「ロボットQ型8号の暗号表」と認したためてあ

った。

「うむ、Q型8号とは、この人造人間ですよ。ホラ、その鉄^{てつ}棒^{ぼう}の上にペンキで書いてある」

係官は、その暗号表を引張りあいながら覗^{のぞ}きこんだ。

「ほうほう、荒天——首ヲ左ニ曲ゲル。魚雷——首ヲ前後ニ振ル。なるほど、いろんな暗号が書いてあるぞ。偵察——『時間ガ来タ』ト発言スル。滑走——膝ヲ折ル。……これで見ると、人造人間を動かす号令は、短かい単語ばかりだ」

「これを見ると、号令単語は四、五十もありますね」

「オヤ、これはおかしい。どうも変だと思ったら、暗号表が一枚、ひき破られているよ。うむ、これは重大な発見だ。おい皆、破れ

た暗号表の一枚を探してみろ」

刑事たちは課長の命令で、再びその辺を丹念に捜してみた。しかし彼等はずいぶんそれを捜しあてることができなかつた。

「どうも、ないようですよ」

「そうか。ウム、よしよし。それで分つたぞ。やっぱりこれは人造人間に靈魂があつたわけではなく、やっぱり生きている人間が、この人造人間を示唆しきしたのだ。犯人はその暗号表を持っているのに相違ない」

大江山課長は、決然と云い切つた。

とにかく博士の居るこの部屋で、誰かが人造人間に号令をかけたのに相違ない。それが誰だか分れば、この事件は解決するので

あつた。さあ、誰がこの部屋に入つて、号令することが出来るか。ウララ夫人であろうか。馬詰丈太郎だろうか。または怪外人ジョン・マクレオ医師であろうか。それとも外の人物だろうか。

ばあやにつき調べてみると、博士はいつも七時から七時半までを夕食の時間にあて、それが済むと一服の睡眠剤をのみ、今博士の死体が横たわっているベッドにもぐりこんで九時半まで丁度二時間というものを熟睡して、その後深夜に続く研究の精力を貯えたくわるのが習慣になつていゝるそうである。

すると今夜も博士の夕食後の睡眠中に、何者かがこの部屋に忍びよつて、人造人間の前に死の呪文じゅもんを唱となえたに違ちがひない。博士殺害の手段は、ようやく臃おぼろげ気ながらも見当がついて来た。

「さあ、誰が号令したのだろう」

係官は 鳩きゆうしゆ首 協議した。

「この上は、関係者を全部検挙して、そのアリバイを確かめるより外ありませんネ」

と大江山は云った。

そのとき帆村探偵は、部屋の片隅に腰を下して、例の暗号表を幾度も熱心に読みかえしていた。

その翌日の午後、帆村探偵は雁金検事のもとへ電話をかけた。

「いやあ、昨日はどうも、いかがです、博士殺しの犯人は決まりましたか」

「ウン、決つたとまでは行かないんだが、重大なる容疑者を捕え
て、今盛んに大江山君が訊問じんもんしている」

「それは誰ですか」

「ウララ夫人だよ」

「えッウララ夫人？　夫人はどうとう捕つたのですか。どこに居たのですか」

「なあにサンタマリア病院に入院していたのだよ。別に大した病

気でもないのだがネ」

「するとあのジョン・マクレオは怪しくないのでですか」

「マクレオは午後二時から午後九時半までずっと病院にいたことが分つた。あの外人の現場不在証明は完全だ」

「そうですか。馬話丈太郎も完全なのでしよう」

「そうだ。あの男は放送局に居たことが証明された。結局残るのはウララ夫人と、耳の聞えないばあやの二人だ。ばあやはウララ夫人が外出から帰つてのち、使いに山の手までやられたのだが、その足で警察へ駆けこんだ。ばあやは博士が殺害されるとき、あの家に居たことは疑う余地がない。しかしばあやは口がきけない。犯人がもし人造人間に号令をかけたものとすればばあやは犯人で

あり得ない」

「なるほど、するといよいよウララ夫人という順番ですかネ。ウララ夫人の帰宅と、博士の殺害と、どっちが早いのですか」

「さあ、それが判然しない。君も知っている通り死体検索から死期が推定されるが、二十分や三十分のところは、どうもハッキリしないのでネ。……とにかく大江山君もウララ夫人の剛情ごうじょうなものには参ったといつて滾こぼしているよ」

「どうも僕には、夫人が博士を殺したような気がしないのですよ。夫人はあの外人と、密ひそかな邪恋じゃれんに酔っていたでしょうが、いまのところ博士は無能力者であり、自分は誰にも邪魔されず研究していられりやいいのであって、その点、妻君の自由行動をすこし

も遮さまたげていないのです。そのウララ夫人が急に博士を殺すとは考
えられませんか」

「オヤオヤ、君も反対論を唱えるんだネ」

「ほう、すると外にも反対論者が居るのですか」

「そうなんだよ。私もそのお仲間だ。私はむしろジョンの行動に
疑念をもつ。なにかこう近代科学をうまく利用して、サンタマリ
ア病院に居ながら、五、六丁はなれたところに住んでいる竹田博
士を殺害する手はないものかね。私はこの点、君の応援を切に望
むものなんだよ」

帆村は雁金検事の突飛とつびな思いつきを訊いてギクリとした。さす
がは歴代検事のうちに、バケモノという異称たてまつを奉られ、人間ばな

れのした智能を持った主と畏敬あるじいけいせられている彼だけあって、その透徹した考え方には愕くのほかない。たとえそれが科学的に実行できないことにしろ、彼の鋭い判断にはブツリと心臓を刺されるの想いがあった。

帆村探偵は、かえす言葉もなく、電話を切った。

考えてみると、まことに残念でもあり、奇怪な事件である。彼は時計を見た。丁度午後二時である。彼は昨夜の現場へ再び行ってみることにした。

河岸かしぶちの博士邸をめぐって、どこから集ったのか弥次馬が蝟い集しゅうしていた。彼等の重かさなりあつた背中を分けてゆくのにひと苦勞しゅうをしなければならなかった。

邸内の警戒は、昨夜よりも嚴重を極めていた。彼は見知りごしの警官に挨拶をして、三階の広間へトントンと上つていった。

「ほう、君はまだ非番にならないかね」

と、帆村は昨夜から顔を見せている警官に云った。

「駄目なんですよ。私が最初にここへ来たものですから、現場を動けないことになっていきます。もつともときどき交代で、下へ行って寝て来ますがネ。お得意の手で早く犯人を決めて下さいよ、ねえ帆村さん」

「ウフ、そのお得意のお呪いまじなをするために、こうしてやって来たわけなんだよ。だが、どうも人殺しのあつた部屋というのは、急に陰気に見えていけないネ。なんとこれは……」

といっているとき、——そのときだった。突然大きな声が、部屋中に鳴りひびいた。

「ええ、後場の市況ごばしきようでございます。新鐘しんかね……」と、細い数字が高らかに読みあげられていった。それはラジオの経済市況けいぎしきように外ほかならなかった。

「——君、ラジオの経済市況なんかで、寂しいのを紛まぎらしているのかネ」

警官はムツとした顔つきで、

「じよ、冗談じゃありませんよ、帆村さん。経済市況で亡ぼう霊れいを払いのけることができるものですか。このラジオは勝手に鳴っているんです。とても騒そうぞう々ぞうしいので、私はむしろ停めたいのです

けれど、課長からすべて現状維持とし、何ものにも手をつけるな
というので、その儘ままにしてあるんですよ」

「えッ、現状維持を——するとラジオは昨夜ゆうべから懸かけつ放ばなしにな
っていたのか。しかし変だなア、昨夜ここへ来たときは、ラジオ
は鳴っていないが……」

「それはそうですよ。貴方がたのお見えになったのは、もう十時
ちかくでしたものネ。ミナサン、ゴキゲンヨクオヤスミナサイマ
セを云ったあとですよ。私は今朝ねむ睡むいところを、午前六時のラジ
オ体操に起され、それからこつちずうつとラジオのドラ声に悩ま
されているのですよ。御親切があるのなら、課長に電話をかけて
下すって、ラジオのスイッチをひねることを許してもらって下さ

いよ」

「そうか。そいつは素敵な考えだッ」

「ええ、スイッチをひねることが、どうしてそんなに素敵だとい
うんですか」

と警官は愕きの目を^{みは}瞠った。

帆村はそれには答えず、帽子をつかむと、その部屋を飛びだし
た。警官は後を見送り、

「ああ帆村さんもいい人なんだが、どうもちとここのところへ来
ているようだよ。可哀想に」

と、耳の上を人指し指で^{おさ}抑えた。

それから十五分ほど経った。

博士邸の門前は、にわか騒がしくなった。警官が硝子窓ガラスから下を覗のぞいてみると、雁金検事や大江山捜査課長などのお歴々がゾロゾロ自動車から降りてくるところが見えた。

「おやおや、また連盟会議か」

一行は階段をドヤドヤと上つて来た。

「どうした、帆村君は。まだ放送局から帰つて来ないかね」

「ええ、放送局ですつて。……別に放送局へ行くともなんと聞
きませんでした」

「おおそうか。まあいい。そうかそうか」

一行は、なんだか嬉しそうな顔をして、時刻のたつのを待つて
いるという様子だった。

帆村が再び姿を現わしたのは、それからなお三十分ほどして後のことだった。彼は右手に藁半紙を綴じたパンフレットのようなものとを大事そうに持っていた。

「やあ皆さん、お待たせしました。やっと一部だけ見つけてきましたよ。文芸部長の書類籠の中にあつたやつを貰もらってきたんです」といって、そのパンフレットを目の上にさしあげた。

一同は呆あっけ気にとられている形だった。

「——さあいいですか。表状を読みますよ。十一月十一日AK第一放送、午後八時より同三十分まで、ラジオドラマ『空襲葬送曲』ならび原作並に演出、馬詰丈太郎——とネ。これは全国中継です」といって彼は、パンフレットの頁ページを一枚めくった。

「いよいよこれから実験にかかりますが、皆さんこつちに寄つていて下さい。それから博士の死体のあつた寝台の上には、誰方かオーバーと帽子を置いて下さい」

雁金検事のオーバーと、大江山課長の制帽とが、白布しろぬのを蔽おおつた空寝台の上に並べて置かれた。それは竹田博士の死体と同じ位置に置かれたことはいうまでもない。一行はこれから何事が起るか、唾つばをのんで、帆村の一挙一動に目をとめた。

「さて——これから、ラジオドラマの台本だいほんを読んでゆきます。なにごとが起つても、どうかお愕おどろきにならぬように」

そういつて彼は、部屋の真中に突立つて、大声で読みあげていった。見てみると彼はそれを函はこの中の人造人間に読み聞かせてい

る様であつた。然し鋼鉄人間はピクンとも動かない。

帆村はジエスチユア交りまじで、一語一句をハッキリ読みあげていった。彼は昔、脚本朗読会に加わっていたことがあつたとかで、なかなかうまいものだつた。

一座はシーンとして、東京が敵国の爆撃機隊に襲撃されるくだりを聞き惚ほれていた。すると第一場第二場は終つて、次に第三場を迎えた。それは太平洋上に於ける両国艦隊の決戦の場面であつた。

「太平洋上、決戦ハ迫ル——」と帆村は高らかに叫んだ。

「西風せいふうガートキワ強クナツテキタ——」

と地じの文章を読む。これは昨夜ゆうべ、千葉早智子がたいへん気取つ

て読んだところだ。

「……海面ハ次第二浪立ツテキタ」

呀あツという声が、一座の中から発した。

「おお大変だ。人造人間が動きだしたぞ」

「こつちへどいた」

ガチャンガチャンと金属音を発して、人造人間は函の中から一歩外に出た。まるで魂が入ったものようであった。

帆村は青い顔をして読みつづける。

「砲声ハマスマス激シサヲ加エテイツタ——」

「砲声」というと、人造人間はユラユラと三步前進してとうとうへや室の中央へ出てきた。一座は鳴りをしずめ、片隅に互いの身体を

ピツタリより添わせた。

「墨ぼくじゆう汁じゆうヲ吹イタヨウニ、砲煙ガ波浪ノ上ヲ匍はツテ動キダシタ」

何にも動かぬ。

「重油ハプスプス燃エヒロガツテユク」

「重油」——という所で、人造人間はクルリと左へ向いた。

「砲弾モ炸裂スル。爆弾モ毒瓦斯ガスモ……」

「爆弾」——というと、人造人間はツツと駛はしつて、博士の寢台のすぐ前でピタリと停つた。これを見ている一同の顔には、アリアリと恐怖の色が浮んだ。

「……恐ロシイ爆音ヲアゲテ、休ミナク相手ノ上ニ落チタ。的まとヲ外はずレテ落チタ砲弾ガ空中高ク水すいちゆう柱ちゆうヲ奔騰ほんとうサセル。煙幕えんまくハ

ヒツキリナシニ……」

うわーッ。

一同の悲鳴。「煙幕」というところで、人造人間は鋼鉄の太い右腕をふりあげて、エイヤエイヤと寝台の上を打つのであった。大江山課長の制帽は、たちまちクシャクシャになって底がぬけてしまった！

帆村はなおも落ついて先を読んだ。「烈風れつふう」「激浪げきろう」「横お転うてん」という三つの言葉が出ると、人造人間は別々の新しい行動を起し、遂に「撃沈げきちん」という言葉を聞くと、すっかり元どおりに函の中に収ってしまった。

ハーツ。一同は期せずして大きな溜息ためいきを揃えてついた。

「……帆村君、ありがとう。君の実験は大成功だよ」

と、雁金検事が夢からさめたように云った。

「いや、恐ろしいやつは、馬詰丈太郎です。彼は博士の熟睡時間をはかって、こうして人造人間に殺害させたのです。人造人間操縦の暗号言葉を巧みに織りこんだラジオドラマを自作し、ラジオでもって人造人間に号令をかける。なんとという素晴^{すば}らしい思いつきでしょう。しかしこれもきょう電話で雁金さんが僕に暗示を与えて下さったので、発見できたものですよ。貴官はやっぱり玄^{くろう}人中の玄人ですね。いやとても僕なんかの及ぶところではありません」

と帆村は真実心からの敬意を表したのであった。

馬詰丈太郎が伯父を殺したわけは、ウララ夫人に対する邪恋を遂げるばかりではなく、博士の財産も自由にするつもりだったという。彼は事実、株に失敗して、某方面に一万円を越える借金に悩んでいた事が取調べの結果分った事である。

ウララ夫人は一年のち、東京を去った。どこへ行ったのか、ハッキリ知る人もなかったけれども、丁度^{ちようど}そのころサンタマリア病院の若きマクレオ博士もそこを辞して、帰国の途^とについたということである。

問題の人造人間は、事件後某所に監禁せられたまま、それつきり陽の目を見ないという噂であるが、この監禁というのは何処にあるのか、誰も話してくれる者がない。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行鳥」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「オール読物」文藝春秋

1936（昭和11）年12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人造人間事件

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>